

お客様各位

元氣通信

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

こんにちは。本年も変わらず弊社と元氣通信を宜しくお願い申し上げます。昨年はまさに「天災」と「混沌」の年となつてしまいました。今なお大変な思いをされている方々が多くいらつしやることを心に深く留めながらも、しっかりと前を向いて進んで行かねばならないと、心を新たにしております。

当社の昨年一年を振り返ると、良いこともあつた反面、様々な面において反省や勉強をさせられたことが、多々ありました。判断に苦しむ場面もありました。しかしその都度思つたことは、今、これを見せられているということは、「成長しなさい」というメッセージなのだ、ということでした。そのことが表面に出てこなければ、気づくこともなくそのまま過ぎてしまい、成長することも無いのです。ですからこれは「変化のチャンス」だということなのです。

確かにその「試練の時」は迷いもしますし、己の力量不足に情けない思いもしますが・・・。辣腕の経営者であれば、一挙に改革を進めることもできましようが、そこは凡人たる者、まあこのようなことを繰り返して「牛歩の歩み」よろしく目指すところに向かつて進み続けることが大切なことだと思っております。

さて、この新年号ですが、「これからの酒蔵を考える」などという、ちよつと大それた名称の御案内を同封させていただきました。一介の設備屋が、何を偉そうに！と思われるかもしれませんが、私共がこれまでのお仕事を通して感じたことや考え方を述べさせていただきます。ご覧いただいて、もしご興味を持たれましたら、お問い合わせさせていただきます。それでは〇〇さまのご健康と御活躍を祈念し、失礼いたします。

日本の野鳥シリーズ

長寿のツバメ

技術営業部 佐藤 弘

本種は英名をバーン・スワローと言う。Barnは納屋だから、あちらのツバメはほとんど人の出入りがない物置に営巣するのだろう。一方、周りがカラスだらけの我が国では、人通りが絶えない建物がツバメには最適な物件らしい。益鳥だからとか家に居つくのは縁起がいいとかで、ツバメに危害を加える人はいない。そこを心得て頼ってくるようだ。

だが巣の下は汚れるから、食品を扱うところなどでは嫌われるのは仕方がない。しかし、たぶん国内のどの法令にも触れないにせよ、ただの民家のオトサンが造成中の巣をホースの水で落とす映像を見せられると、ベニヤか新聞紙でも敷けばすむものをなんと無慈悲なことを、と思う。

本編「オシドリ」の家主、木下氏がツバメの研究を始めた動機は、本当に去年と同じ鳥が帰ってくるのかという素朴な疑問だ。研究の結果、雄は生きている限り同じ巣に戻り、雌は遠く離れた町で新たにペアを組むという。既に繁殖能力を持つ子供の雄は、やはり町に戻って来るとの事だ。彼は組み合わせを変えた何色かのリングをツバメの脚に装着し、双眼鏡で個々を特定してこれを見極めた。

夜更けに商店や住宅の軒先で脚立を置き懐中電灯を持つ人物がいたら、パトロール中の警察官に職務質問されて当然だ。六日町署新任のお方だな、と思いながら応答すると言う。彼の夜なべ作業を知らないお巡りさんは六日町にいないらしい。もちろんツバメの家主には事前に了解を得ていて、調査結果などをミニコミ紙「ツバメだより」として数十軒に配っている。

これ迄のツバメの長寿記録はオシドリの稿で述べた満11歳の雄だったが、最近の「たより」によれば満13歳の雄が現れたという。マレーシア辺りまで往復する渡りをこなし、なおかつ雌にモテる現役だから恐れ入る。

さて、こちらもバリバリで、満110歳まで現役続行を宣言なさる日野原重明先生に近い人が言うには、先生がポケットからハンカチを取り出すとほのかにコロンの香りが漂うとか。なんともおしゃれだ。まねてみたい気がしないでもないが、身の程をわきまえて止めておくことにする。



“ちょっと一息”

No.3
生産部部長 山本 知男

この間、佐渡裕／ベルリン・ドイツ交響楽団の演奏会に行ってきました。

今、一番旬な佐渡さんの指揮での生演奏なので非常に期待して行きました。過去に何度か佐渡さんとシエナ・ウインドオーケストラでの熱く楽しい演奏を聴いていましたが、ベルリンフィルでの大評判もあって、非常に期待して行きました。まさに今回は打って変わって、非常に繊細に、時には激情たっぷりとも言う感じで、すばらしい演奏を聴かせてくれて心に響く名演奏、感動して帰って来ました。

ところで指揮者と言うのはお客にお尻を向けて変な踊りを踊っている失礼な奴と言う話を聞いた事がありますが、この指揮者が大事な人で、まさに演奏を牛耳っているんですね。

プロの演奏者は黙ってても一流の演奏をしますが、その分非常に個性が強くて、我も強いんです。時には“先生”と言われるし、当然人に教える時はお金を取れるし、私でもたまに学生に教える機会もあるのですが、「先生」なんて呼ばれて、「いや、クラリネットが好きなたダのオジさんです。」なんて言ってますが・・・。そんな感じですから、個性が強くて音楽性が違っている人達が、好き勝手に演奏したら全然まとまりのない演奏になってしまいます。それをまとめるのが指揮者です。

でも指揮者も大変。私の強い演奏者達は指揮者が何を言うか、どうまとめようとするか、しっかり見ています。中にはワザと間違えて演奏するイヤらしい人もいます。カノ有名なカラヤン先生はオケ全体でff（非常に大きな音）の時に鳴らす、トライアングルの音（ちっちゃな音）が気に入らないと何回もリハさせたとか。それぐらい繊細に音をまとめないと演奏者になめられてしまいます。

と、何か書いているうちに上司と部下の関係に似てるなあと感じてしまいました・・・。

何を言うか、どんな事をするか、何を考えているか・・・、みんなしっかり見ているんですね。それでちょっとミスしてしまうと厳しい突っ込みが入る。

私も「たダの音楽好きなオジさん」なんて言ってますが、会社に居ればこれでも「部長」。しっかり見られていると感じながら、日々緊張の時を過ごしています。

「そんな事ないでしょ。結構気楽にやってるじゃないですか。」って言うんだらうなあ、あいつらは・・・。

佐渡さんのように感情豊かに引っ張って行かねば・・・と思いつつ今日もアタフタやってます。

◆ ちょっと豆知識 ◆ その11

技術営業部課長 成田 護

新年明けましておめでとうございます。旧年中、皆様方には大変お世話になりました。本年もどうぞ宜しくお願い致します。

2010年の秋に販売を開始し、「使っていても中が臭くならない」ということでご好評をいただいております「はなな」という手袋。これを弊社が取扱うに至った経緯が非常に興味深いのでご紹介したいと思います。

ある日、新潟県内でお勤めの杜氏から次のような相談を持ちかけられました。

昔、ゴムメーカーの営業が飛び込み営業で来て愛想で手袋を購入した。粕剥きにずっと使っていたが、使っても使っても中が臭くならないことに気付いた。スタッフに非常に好評で、追加の購入を検討したいが、置いていった名刺もどこに行ったか分からないし、成田さん、手首のところに印刷されているロゴマークからメーカー探し当て取り寄せてよ、というものでした。

「はなな」の手首には「WATTENSTEIN」のロゴが印刷されていますが、このうちの半分くらいは擦り切れてしまって、一目見た限りでは判読不能だったことを今でも覚えています。アルファベットの並びから、英単語でないらしいことが分かりましたので、どうにかこうにか解読して、前橋市にあるダイヤゴムという会社のブランドであることが判明しました。

長い交渉の末、販売の許可を得るに至り、ご相談いただいた杜氏には「正直探してもらえとは思ってなかった。本当にありがとう」という声を掛けていただきました。

Vソールと言い、お客様から「探して」と言われて取扱うようになった品が大変ご好評をいただくという例が多いように感じます。それもそのはず、お客様が良い・欲しいという商品を取り扱う訳ですから、同業の方に売れるのは「自明の理」なのです。

今年も、お客様から多くのことを学ばせていただきたいと思います。宜しくお願い致します。

愛用品は女性用？



生産部主任 島貫 修一

女性用の物を愛用している。なんて言うとか気持ち悪いとか変態などと思われるかもしれないが、残念なことに愛用しているのは財布それも「がまぐち」。財布の中身と言えば紙幣・硬貨・ポイントカード・会員カード・クレジットカードなどだが、この中で最も出し入れしにくいのが硬貨。そして最も日常的に使われるのも硬貨。それなのに男性用の財布は硬貨を拒絶しているかのような形で、とても実用品とは思えない。それに対して「がまぐち」は大口を開けて硬貨をがばっと飲み込みどっと吐き出すので、一度使ったら手放せない。

ところがその生活必需品の「がまぐち」がこわれて買い替えねばならなくなってしまった。新潟市内の大型ショッピングセンター数件を回ってみたが、これはと思う物が無い。金具が小さめで角が丸くないとズボンのポケットに入らないし、色は黒か紺か茶でピンクなんてとんでもない。あちこち探し回った結果やっと見つけたのは福島駅西口のヨーカドーで、東洋史の勉強会に出席するために福島市に行った時のこと（福島市出身です）。

服・靴・バッグ・小物など男女別の物は、男性用がより実用的で女性用がデザイン重視で装飾的にできていることが多いが、財布の場合は事情が異なるようだ。男性用はポケットに入れることを前提にしているので、ポケットに入るサイズと形にしなければならないが、女性用はバッグに入れるのでそういった制約が無い。そのため使い易い大きさと実用的な財布にできており、それが「がまぐち」だった。お金を持ち歩かなくても買物ができる未来も迫ってきたが、その時までには「がまぐち」を愛用していくつもりだ。